茨城県教育財団文化財調査報告第69集

主要地方道結城野田線道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

和尚塚古墳

平成3年3月

財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第69集

主要地方道結城野田線道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

和尚塚古墳

平成3年3月

財団法人　茨城県教育財団

序

茨城県は，21世紀に向けて県内の交通網の整備を進めており，結城市内においても主要地方道結城野田線の道路改良工事が計画されております。これは，従来の道路の西側にバイパス道路を新設するものでありますが，その予定地内には和尚塚古墳が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び，和尚塚古墳の発掘調査を平成２年８月１日から同年８月31日まで実施いたしました。今回の調査によって，古墳の周溝の一部を発見し，古代から近世にかけての遺物を少量ではありますが採集することができました。

本書は，和尚塚古墳の調査成果を集録したものでありますが，研究の資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深め，ひいては教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理を進めるに当たり，委託者である茨城県をはじめ，茨城県教育委員会，結城市教育委員会等関係各機関及び関係各位からいただいた御指導・御協力に対し，衷心より感謝の意を表します。

平成３年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　礒　田　　勇

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，平成２年度に発掘調査を実施した茨城県結城市大字結城字公達9,862―1番地ほかに所在する和尚塚古墳の発掘調査報告書である。

2　和尚塚古墳の調査及び整理に関する当教育財団の組織は次のとおりである。

理事長		礒田　勇	昭和63年６月～
副理事長		小林　元	昭和63年４月～
常務理事		小林　洋	平成元年４月～
事務局長		一木邦彦	平成元年４月～
埋蔵文化財部長		石井　毅	平成２年４月～
企画管理課	課長	北澤勝行	平成２年４月～
	課長代理	水飼敏夫	平成２年４月～
	主任調査員	小山映一	平成２年４月～(平成２年度　調査・整理・執筆・編集)
	係長	園部昌俊	昭和63年４月～
	主事	吉井正明	平成元年４月～
	主事	大貫吉成	平成２年４月～
調査課長（部長兼務）		石井　毅	平成元年４月～
整理課長		沼田文夫	平成２年４月～

3　発掘調査にあたっては，小山と共に臨時調査員の玉井輝男氏が現場を担当した。

4　本書に使用した記号等については，第３章の項を参照されたい。

目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査方法……1
　第３節　調査経過……3
第２章　位置と環境……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……6
第３章　遺構と遺物……9
　第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法……9
　第２節　古墳……11
　第３節　溝……16
第４章　考察……20
結　語……22

挿　図　目　次

第１図　調査区名称図……１
第２図　基本土層図……２
第３図　結城市古墳分布図……８
第４図　和尚塚古墳実測図(A)……12
第５図　和尚塚古墳実測図(B)……13
第６図　第１号溝実測図……17
第７図　第２号溝実測図(A)……18
第８図　第２号溝実測図(B)……19

写真図版目次

ＰＬ１　上　遺跡全景
　　下　和尚塚古墳全景
ＰＬ２　上　遺構全景
　　下　和尚塚古墳墳頂部の石碑
ＰＬ３　古墳周溝部出土遺物
ＰＬ４　古墳周溝部出土遺物
　　第１号出土遺物
　　第２号溝出土遺物

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

県道結城野田線は，茨城県の結城市，三和町，境町と利根川を挟んで千葉県の野田市とを結んで，茨城県の南西部を北東から南西へ走る主要な地方道である。しかるに，近年の産業・経済の発展とそれに伴う車社会の進行は交通量を著しく増加させ，従来の道路では十分にその役割を果し得なくなりつつある。特に結城市街及び国道50号付近は，住宅が密集し，道路幅が狭いこともあって慢性的な交通渋滞がみられ，早急な対策が待たれている。このような状況の中で，茨城県は，結城地内において現在の道路の西側にバイパスを新設して道路整備を図ることとなった。

工事に先立ち，茨城県道路建設課は，昭和62年10月９日に茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し茨城県教育委員会は，工事予定地内に和尚塚古墳が存在することを報告した。昭和62年10月26日に茨城県教育委員会と茨城県道路建設課は，遺跡の取り扱いについて協議を行なった。その結果，現状保存は困難であることから，発掘調査による記録保存の措置が講じられることとなり，茨城県教育委員会は，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

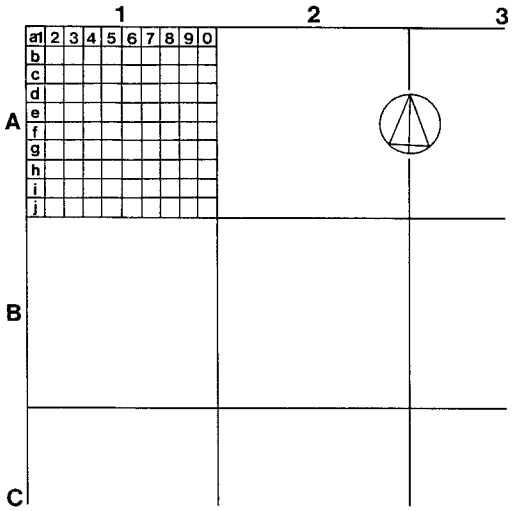
当財団は，和尚塚古墳の発掘調査について茨城県道路建設課と詳細な調整を重ね，埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び，平成２年８月１日から１ヵ月間で和尚塚古墳の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査方法

1　地区設定

発掘調査を実施するにあたり，遺跡及び遺構の位置を明確にするため，調査区を設定した。

日本平面直角座標第IX座標系，Ｘ軸(南北)32,400m，Ｙ軸(東西)3060mを基準点として40m方眼を設定し，この40m四方の区画を大調査区とした。さらに，この大調査区を東西・南北に各々十等分して，４m四方の小調査区を



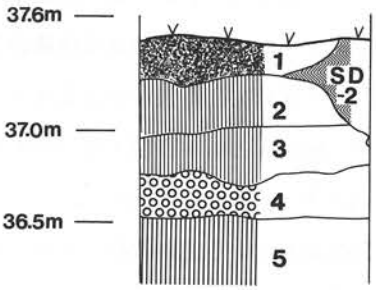
第１図　調査区名称図

設定した。

調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用いて表記した。大調査区は，上記の基準点から北へ40m，西へ40mの点を起点とし，北から南へA，B，C……，西から東へ1，2，3……とし，「A1区」「B2区」のように呼称した。小調査区は，北から南へa，b，c……j，西から東へ1，2，3……0とし，大調査区の呼称と合わせて「A1a_1区」「B2b_2区」のように呼称した。前述の基準点は「B2a_1区」の基準杭の位置に当たる。

2　基本層序の検討

上物除去後の地表面観察の結果，調査区内は広範囲にわたって撹乱されていると思われたため，比較的地表面が遺存している調査区南端のB1f_0区内にテストピットを設定し，基本層序を観察した。



第2図　基本土層図

その結果，地表面下約20cmの標高37.4mからは，間に鹿沼軽石層を挟む関東ロームが厚く堆積していることが確認されたが，調査の進行に伴い，調査区北部（A2d_4区）では関東ロームの検出面が標高38.6mであることなどから，調査区全体は北から南に向って緩やかに傾斜していることが明かになった。

次に，テストピットの基本層序について概述する。

1層は耕作土で，20～25cmの厚さがある。色調は暗褐色である。2層はソフトローム層で，24～30cmの厚さがある。色調は明褐色である。3，5層はハードローム層で，硬く締まり，色調は共に明褐色である。3層は，18～30cmの厚さで，鹿沼粒が少量混入している。4層は鹿沼軽石層で，16～24cmの厚さがある。色調は橙色である。

3　遺構確認

和尚塚古墳の調査は，調査対象面積が狭く，調査期間が1か月間と短かいことや，古墳の周溝部のみの調査ということで試掘を省略し，遺構確認面までの深さを確認するためのピットを数か所掘削した段階で，重機を導入し表土除去を実施した。その後，調査区の北端から遺構の確認調査を進め，周溝と思われる落ち込みと，溝2条を検出した。しかし，調査区の3分の1程は，かなり深く撹乱を受け，古墳に伴うと思われる遺物はほとんど出土しなかった。

4　遺構調査

本古墳の遺構調査は，次のようにして実施した。

周溝及び溝は，適宜土層観察用ベルトを設定して掘り込んだ。土層は，色調・含有物・締り具合・粘性等を観察し分類した。色調の決定にあたっては，「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄著　日本色研事業株式会社）を使用した。

遺構の調査は，撹乱を受けている部分が多いことから，本来の形状を念頭に置いて行った。

遺構の実測は，平面形については，水糸を１m方眼に地張りして計測することを原則としたが，周溝については，平板を使用して計測した。土層と遺構断面図の作成については，水糸を最適な高さで水平に設定して計測した。

遺物の取り上げについては，遺構に伴うものかどうかを慎重に観察した上で，出土位置，レベル等を記録して取り上げた。

第３節　調査経過

和尚塚古墳の調査は，平成２年８月１日から同年８月31日までの１か月間実施した。調査期間が短かいこともあり事前の準備を周到に進め，８月１日から上物除去等の作業に入れるようにした。以下，発掘調査の経過を日を追って記述する。

〈８月上旬〉

１日　本日から調査を開始する。調査前風景を撮影した後，業者に委託して上物の除去を実施する。

なお，現地事務所を，結城市中央公民館の一室に開設する。

２日　発掘調査の円滑な進行と作業の安全を祈願して，関係者列席のもとに仏式で「鍬入式」を挙行する。

３日　重機による表土除去を遺跡北端から開始する。周溝状の落ち込みを確認するが，遺物はほとんど出土しない。

８日　遺構確認作業を終了する。調査区全域は撹乱を受けていることから遺構確認作業は困難を極めたが，周溝状の落ち込み１か所，溝１条を確認する。

９日　第１号溝から遺構の掘り込みを実施する。

〈８月中旬〉

10日　台風11号来襲のため，現場作業を中止する。

13日　遺構調査を進める。14日から16日まで盆休みに入るため，調査区内外の安全対策を

実施する。

〈8月下旬〉

28日　遺構の掘り込みを全て終了し，周溝・第2号溝の平面図及び遺構断面図の作成を継続する。

29日　遺跡清掃後，ラジコンヘリによる遺跡全景写真の撮影を実施する。

30日　現場における一切の調査を終了する。現場周辺の清掃と安全対策を実施した後，本日を以て作業員を解雇する。同日，委託者・地元教育委員会に対し調査報告会を実施する。

31日　発掘機材の搬出，関係者への挨拶回り等を行ない，現地における一切の業務を終了して現地事務所を閉鎖する。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

和尚塚古墳は，茨城県西部の結城市結城字公達9,862番地ほかに所在し，JR水戸線結城駅の南西約800mに位置している。遺跡の所在する結城市は，昭和29年３月に結城町・絹川村・上山川村・山川村・江川村の１町４か村が合併して市制を施行した。市域は，東西約5.5km，南北約9.3kmと南北に細長く，東は鬼怒川を挟んで下館市・関城町と，南は八千代町・三和町と，北及び西は江川・西仁連川を挟んで栃木県小山市とそれぞれ境を接している。市の総面積は約62.2㎢である。

市の主な産業は，手工業の絹織物業と農業である。特産物の結城紬は，渋味のきいた高級絹織物として市場性が高く，年間３万反が生産され，生産額は50億円に達している。農業は，首都圏向けの野菜，かんぴょう，桑苗の栽培と養蚕が主で，特に桑苗の生産高は全国第１位を占めている。

また，江戸時代の享保７年（1722）に開削された吉田用水は市の中央部を南北に流れ，現在も周辺地域約2,000haの農地の灌漑を行っている。

交通は，市の北部を国道50号線とJR水戸線が東西に併走し，JR水戸線は，結城市内に東結城，結城，小田林の３駅が設置してあり，特に結城駅は，北側に市街地が広がっていることもあって利用客が多い。

本古墳は，猿島台地の東側を南北に細長くのびる結城台地の北端に位置している。結城台地は，日光連山に源を発して南流する鬼怒川と，その支流である栃木県国分寺町に源を発して南流する江川とに挟まれた平坦な台地で，台地には両河川の支流が樹枝状に入り込んでいる。台地上は畑地として，鬼怒川・江川流域の沖積低地は水田として利用されている。市域は全体的に平坦で，最も標高が高いのは結城城本丸の41.5m，最も低いのは七五三場（しめば）の水田面の17.5mである。

本古墳は，高さ5.8mの墳丘を有するが，今回の調査はその西側に接する幅22m，長さ80mの地域で，調査面積は905㎡である。本古墳は，市の北西部台地状に位置し，東・南・西を江川からのびる小支谷が囲んでいる。調査区の標高は38m前後で，支谷との比高差は３～４mである。

第2節　歴史的環境

昭和62年3月に茨城県教育委員会が発行した「茨城県遺跡地図」によると，結城市内には先土器時代から中世にかけての170の遺跡が確認されている。

先土器時代の遺跡は，西光寺（上山川）と大野原（北南茂呂）の2遺跡で，西光寺遺跡からはナイフ形石器や石槍が出土している。

縄文時代になると遺跡数が増加し，早期の撚糸文土器を出土する向原（むかいはら）遺跡（鹿窪）や，晩期の安行III式や大洞式土器を出土する坂（さか）の上（うえ）遺跡（鹿窪）など71遺跡が確認されている。中でも，中期の阿玉台式，加曽利E式，大木7～9式等の土器を出土する遺跡の分布が目立っている。前出の坂の上遺跡では，市教育委員会によって昭和54年に一部発掘調査が行われ，中期と後期の石組みの炉を持つ住居跡各1軒と，袋状土坑3基が発見されている。

弥生時代の遺跡は，37か所が確認されている。そのほとんどが後期のものであるが，鬼怒川対岸（東岸）の下館市女方には，中期の再葬墓跡として著名な女方（おさかた）遺跡が所在している。

古墳時代になると，遺跡数は増加し，田川・江川及びそこから台地中央に向って樹枝状にのびる小支谷の周辺台地上に古墳群を含む68の遺跡の存在が確認されている。特に後期には，律令期の郷（ごう）に対応するかのように，松木合地区，曽我殿台地区，結城寺周辺，茂呂地区等を中心に数多くの遺跡が発見されている。この時期には，それまで遺跡が発見されなかった。田川と鬼怒川に挟まれた沖積低地内の微高地にも集落が形成されている。このことは，該期の人々の生活圏の拡充と農耕の進展を窺わせるものである。

市域における古墳時代の集落は，昭和57・60～62年度に当財団によって発掘調査された小田林・本田・善長寺の3遺跡によってある程度知ることができる。これらの3遺跡は，いずれも江川東岸の台地上に位置している。小田林遺跡からは，前期の住居跡37軒が検出され，特に第36号住居跡から出土した現存器高59.4cmの大型壺形土器は，類例の少ないものとして注目されている。本田遺跡からは，中期の住居跡1軒が検出されている。善長寺遺跡では，前期41軒・中期2軒・後期15軒の住居跡が検出され，後期の住居跡の中には県内でも数少ない玉作り工房としての性格を持つもの5軒が含まれている。

市域の古墳は，古墳時代中期後半から末葉にかけて出現し，6～7世紀に最も多く造られている。これらの古墳は，該期の集落の分布と対応するように，主に田川・江川沿いや市南端の台地上に形成されている。

田川沿いでは，上流に，鶏形埴輪の頭部を出土した松木合古墳群や5世紀代の滑石製刀子を出土した曽我殿台古墳群が，下流に鹿窪古墳群が確認されている。さらに，田川と鬼怒川本流とが合流する地域には，その広大な沖積低地に面して市内最大の林・備中塚古墳群が形成されており，

ここの林愛宕塚古墳から，方格規矩八乳鏡や五鈴釧等が出土している。

江川沿いには，５世紀代の帆立貝式古墳とされる富士浅間塚古墳を含む小田林古墳群を北端として，田宮，大戦坊，北南茂呂，大木等の地区に小円墳や前方後円墳が点在している。

市南端の旧鬼怒川河床と山川沼に突出した台地上には粕礼古墳群があり，６世紀代後半とされる瑪瑙製の勾玉が出土している。また，結城地区にも今回調査の対象となった和尚塚古墳をはじめ，下山天神山古墳や繁昌塚古墳が点在している。

奈良・平安時代の遺跡は，68遺跡が確認されている。この時代の市域は，下総国結城郡に属していた。結城郡は高橋・小埆・茂治・結城と余戸の５郷から成り，高橋郷は栃木県高椅地区に，小埆郷は結城市松木谷・曽我殿台地区に，結城郷は結城寺周辺に，茂呂郷は茂呂地区にそれぞれ比定されている。奈良時代初頭には，旧結城寺が創建され，寺の北東500mには，結城寺の瓦を生産した８世紀代の八幡瓦窯跡が存在している。旧結城寺は，現在「結城廃寺」として市教育委員会が発掘調査を進めている。

中世には，関東八大名の一つに数えられ，結城100万石といわれるまでに繁栄した結城氏とその一族の本拠地で，この時期の遺跡には，結城氏の居城とされる結城城跡(本町)，結城氏一族の山河氏の居館跡とされる東持寺(下山川)など34遺跡が確認されている。室町時代の永享12年(1440)３月から嘉吉元年（1441）４月にかけては，結城氏11代当主結城氏朝が関東公方足利持氏の遺児を迎えて挙兵し，幕府軍と戦った結城合戦が当地で繰り広げられた。この戦いにより，結城氏は一時断絶し，旧結城寺もこの時焼失したと伝えられている。

なお，近世になると，元禄13年（1700）に水野勝長が１万８千石で入封し，以来，当市は明治４年（1871）の廃藩置県に至るまで水野氏の治めるところとなった。

参考文献

茨城県教育財団文化財調査報告第51集　「一般国道４号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書２」（結城地区）　茨城県教育財団　1989年３月

茨城県遺跡地図　茨城県教育委員会　1987年３月

結城市史　第４巻　古代中世通史編　結城市　1980年10月

茨城県大百科事典　茨城新聞社　1981年８月

郷土資料事典　茨城県・観光と旅　人文社　観光と旅編集部　1968年10月

第3図　結城市古墳分布図

第３章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

１　遺跡の概要

和尚塚古墳は，茨城県遺跡番号2333，結城市遺跡番号３の周知の遺跡である。今回の調査は，古墳の墳丘西側に接する905㎡であるが，古墳の性格をより明かにするため，墳丘部地権者の了解のもとに，墳丘の現況を観察し，平面図を作成した。

調査の結果，本古墳の周溝の一部と溝２条を検出した。

周溝は，浅くて幅の広いもので，墳丘を方形に巡る様子が確認されているが，撹乱を受けている部分が多い。古墳及びその時代に関する遺物は出土していない。

第１号溝は，近世以降のものである。第２号溝は，周溝より古いものである。

遺物は，周溝や溝の覆土から土師器・須恵器・土師質土器の小皿・内耳土器・擂鉢・施釉陶器等の小破片が少量とスラグ３点・古銭（寛永通宝）１点・石片２点が出土している。須恵器片には，銅滓が付着している。

２　遺構・遺物の記載方法

本書では，遺構・遺物の記載に対して次のような方法をとった。

(1)　使用記号

ＴＭ……古墳　　溝……ＳＤ

(2)　土層の分類

調査時の土層観察は，第１章第２節４「遺構調査」の項で述べたとおりであるが，本章では，それらの観察を基に，土色と含有物については実測図中に記載し，堆積状況については本文中に記載した。色相については，本遺跡の覆土等はすべて「新版標準土色帖」で分類するところの「7.5YR」にあたるため省略した。

(3)　遺構実測図の作成方法と記載方法

○周溝の平面図については，縮尺50分の１の原図をさらに２分の１に縮小してトレースし，さらに２分の１に縮小して記載し，その土層図と遺構断面図については縮尺20分の１の原図をトレースし，さらに３分の１に縮小して記載した。

○第１号溝の平面図・土層図・遺構断面図と第２号溝の土層図・遺構断面図については，縮

尺20分の１の原図をトレースし，さらに３分の１に縮小して，第２号溝の平面図については，縮尺40分の１の原図をさらに３分の１に縮小して記載した。

第2節　古墳

和尚塚の概要

和尚塚古墳は，従来円墳とされてきたが，今回の調査により，一辺20m，高さ5.8mほどの方形の墳丘を有し，周溝もほぼ方形に巡ることが明らかとなった。

墳丘は，全体に篠竹や雑木に覆われているが，北側の一部にはつつじが植えられ隣接する民家の庭園の一部として利用されている。

墳頂部は，やや平坦となり，その北寄りに石碑が建てられられている。石碑は，上位2分の1が欠損しているため，表で「□塚」，裏で「年六月建之」の文字を確認するにとどまったが，現在の本古墳の名称から考え，表の文字は「和尚塚」であった可能性が高い。

斜面部は，急角度で傾斜し，東・西・南・北の各面の境は緩やかな稜をなしている。東側の斜面部には，墳頂に登るための石段が設けられ，裾近くには太平洋戦争時に防空壕として掘ったと伝えられる口径0.9m，深さ4mほどの袋状の横穴が存在する。南側の斜面部には，墳頂から裾部にかけて盗掘坑と思われる窪みが確認される。

裾部は，宅地や畑地のために削り取られ高さ1～2mの急崖をなしており，北側の宅地との境界には上幅1.5m，深さ1mほどの根切溝が掘られている。

周溝は，調査区の北端から南端にかけて帯状に検出された。周溝の大部分は，昭和57年以降の造成工事により撹乱されており，部分的には第5図に記載したように周溝の形状が全く残らないほどに掘り込まれている。

周溝の形状は，墳丘を方形に取り巻くように掘られているものと推定され，調査区内では逆コの字状を呈し，南・北両端はそれぞれ東方に延びている。周溝のほぼ中央部にあたるA2j_3区，A2j_4区付近では周溝の掘り込みが確認されていないことから，あるいは，この部分が土橋状に掘り残されれていたことも推定される。

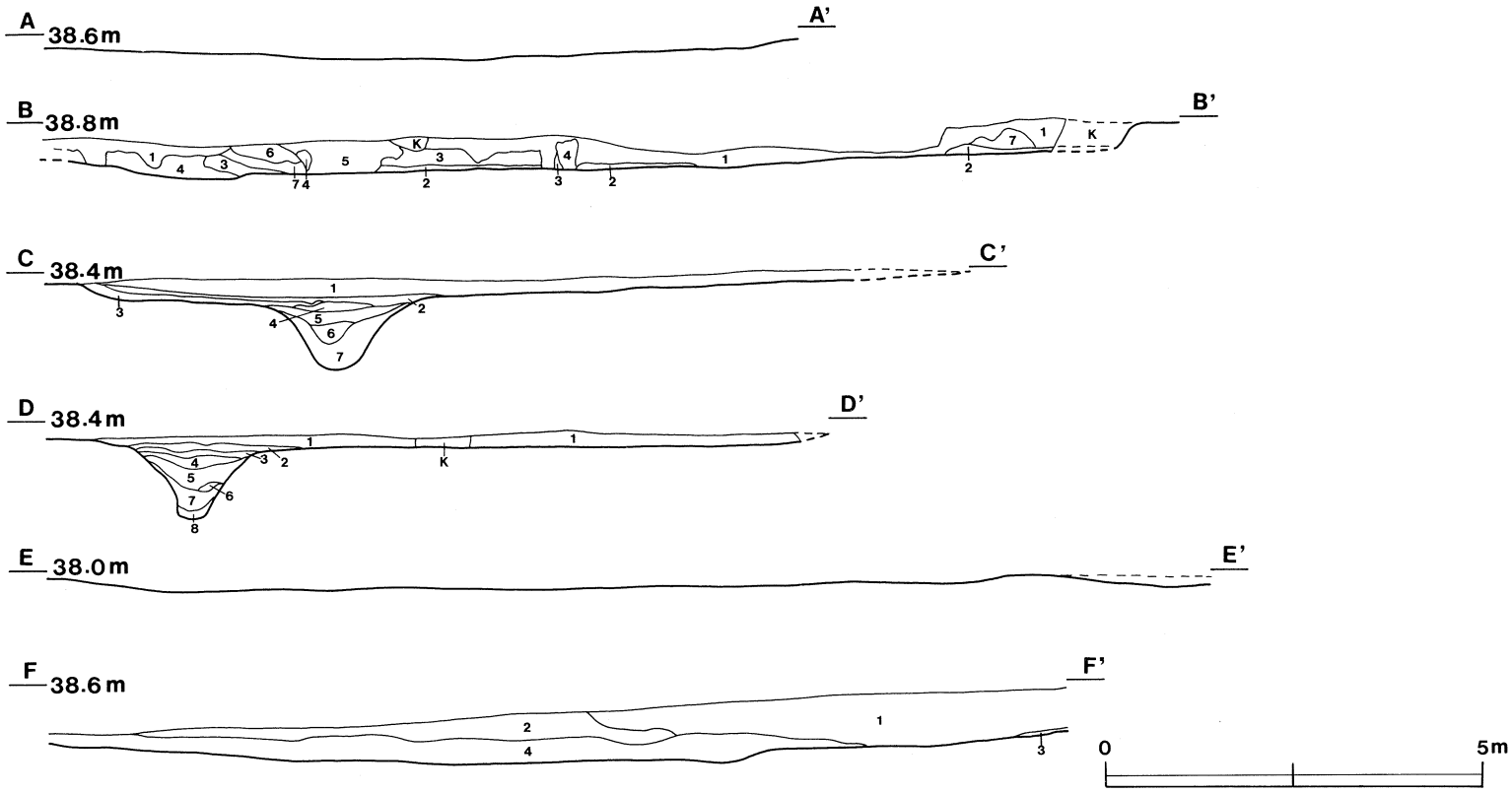
遺物は，土師器・須恵器の破片と土師質の小皿・内耳土器・擂鉢等の破片・小銭（寛永通寶）が周溝の覆土から出土しているが，いずれも本古墳に関係するものとは思われない。

1　墳丘

平面形は方形で，主軸方向はN－13.5°－Eを向き，角は北北西，東北東，南南東，西南西の方向にそれぞれ張り出している。

現存規模は，東西21.7m，南北28.4mで，高さ5.8mである。東西と南北の長さについては，墳

第4図　和尚塚古墳実測図(A)



TM－1B　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量を含む　人為堆積
2　明褐色　粒状のローム層　風積層
3　暗褐色　炭化粒子小量　SD－2覆土
4　黒褐色　ローム中ブロック多量　撹乱
5　にぶい褐色　ローム小ブロック中量　撹乱
6　明褐色　ローム小ブロック中量　人為堆積
7　明褐色　ローム粒子少量　人為堆積

TM－1C　土層解説

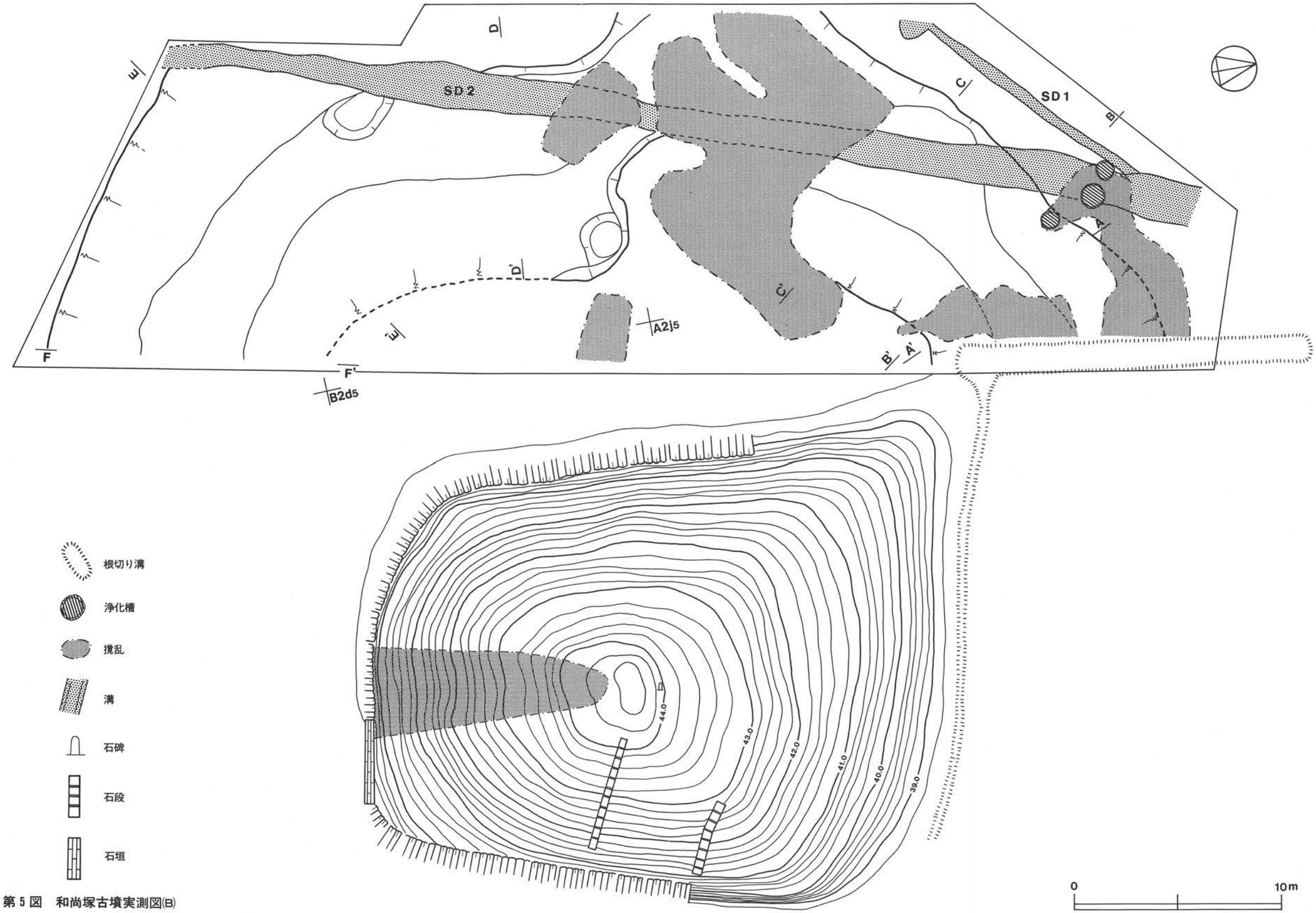
1　暗褐色　炭化粒子少量　ローム粒子中粒
2　褐　色　ローム粒子多量　しまり弱い
3　暗褐色　炭化粒子少量　ローム粒子少量
4　黒褐色　〃　〃
5　極暗褐色
6　黒　褐　色　} SD－2覆土
7　黒　褐　色

TM－1D　土層解説

1　暗褐色　炭化粒子少量　ローム粒子中量
2　褐　色　ローム粒子多量　しまり弱い
3　黒　褐　色
4　黒　褐　色
5　黒　褐　色
6　極暗褐色　} SD－2覆土
7　黒　褐　色
8　黒　褐　色

TM－1F　土層解説

1　褐　色　ロームブロック　鹿沼土ブロック多量　客土
2　暗褐色　焼土粒子少量　ローム粒子少量　耕作土
3　暗褐色　〃　〃
4　黒褐色　〃　〃　周溝覆土



第 5 図　和尚塚古墳実測図(B)

丘の裾部が削られているため明らかではないが本来はいずれも29.0mを越えるものと思われる。

墳丘から裾部にかけての傾斜は，25.0°～30.0°である。

2　周溝

調査区北端のA2e_5区から，南端のB2h_3区にかけて帯状に確認され，南・北両端は急角度で東に方向を変え，墳丘を取り巻くように調査区外へと延びている。周溝の西部は，南・北に延びる第2号溝とほぼ重なるように構築され，第2号溝の上位を掘り込んでいる。周溝の中軸線はN－15.0°－Eを指し，墳丘の主軸線とほぼ一致している。

なお，周溝の中央部にあたるA2j_3・A2j_4区付近は，幅5m以上にわたって掘り込みが確認できない。

規模は，長さが周溝外側で55.2m，内側で32.1m，幅は10.2～14.1m，深さは0.15～0.51mである。全体に浅く幅広であるが，南側にいくに従って幅と深さを増し，掘り込みの形状が良好に把えられる。

断面形は「◡」を呈し，全体に緩やかに傾斜している。

覆土は，比較的撹乱の少ない場所に土層観察用ベルトを設定して観察した。上位には耕作土又は客土が，下位には周溝の覆土と思われる暗褐色土や黒褐色土が，最下層には風化により粒状化した関東ロームが堆積している。

3　遺物

覆土中から，土師器の破片1点，須恵器の破片5点，土師質土器の小皿の破片22点，内耳土器の破片16点，擂鉢の破片1点，陶器の破片1点，古銭（寛永通寶）1点が出土している。

土師器の破片は，摩耗した細片で，時代や器種を特定することはできない。強いていえば甕の類と思われる。須恵器は，同一個体と思われる坏類の破片で，いずれも内面に銅滓が付着しているが，細片のため時代を特定することはできない。

土師質土器の小皿や内耳土器，擂鉢は，いずれも中世の遺物と思われる。破片のため各遺物の詳細については不明であるが，小皿の底部には回転糸切り痕が，擂鉢には14条1単位の擂溝が認められる。

陶器は，無釉の焼締のもので，破片のため詳細については不明である。

古銭は，直径2.3cmの銅銭で，周溝の南部B2e_3区から出土したものである。表には「寛永通寶」の文字が鋳出され，背字はない。孔は，一辺6.2mmの方形である。新寛永通宝と思われる。

第3節　溝

当調査区からは，2条の溝が検出され，第1号溝は近世以降のもの，第2号溝は周溝よりも古いものと推定されている。

第1号溝

本跡は，調査区北部のA2d_4区からA2g_2区までの計6グリットにまたがって所在し，N－47°－Eで南西・北東に延びている。北東部は第2号溝の上位を掘り込み，その先は宅地造成による撹乱により消滅している。南西端は調査区外へと延びている。

規模は，上幅0.4～0.7m，下幅0.1～0.3m，深さ0.1～0.2m，全長13.4mの小形のものである。

断面形は，「∪」形である。

底面は，標高36.0m前後でほぼ水平であるが，全体に凸凹している。

覆土は一層で，締まりは弱い。自然堆積と思われる。

遺物は，覆土中から，内耳土器の破片5点，近世以降の陶器の破片3点，石片（頁岩）1点が出土している。いずれも流れ込みによるものと思われる。

本跡は，近世以降に掘られたもので，その性格は不明である。

第2号溝

本跡は，A2d_4区からB1e_0区までの計20グリットにまたがって所在し，N－21°－Eでほぼ南・北に延びている。本跡の大部分は古墳の周溝によって，北部は第1号溝によって上位を掘り込まれている。南・北両端は，それぞれ調査区外へと延びている。

規模は，上幅1.6～2.1m，下幅0.2～0.4m，深さ0.6～1.0m，全長48.5mで，しっかりと掘り込まれている。

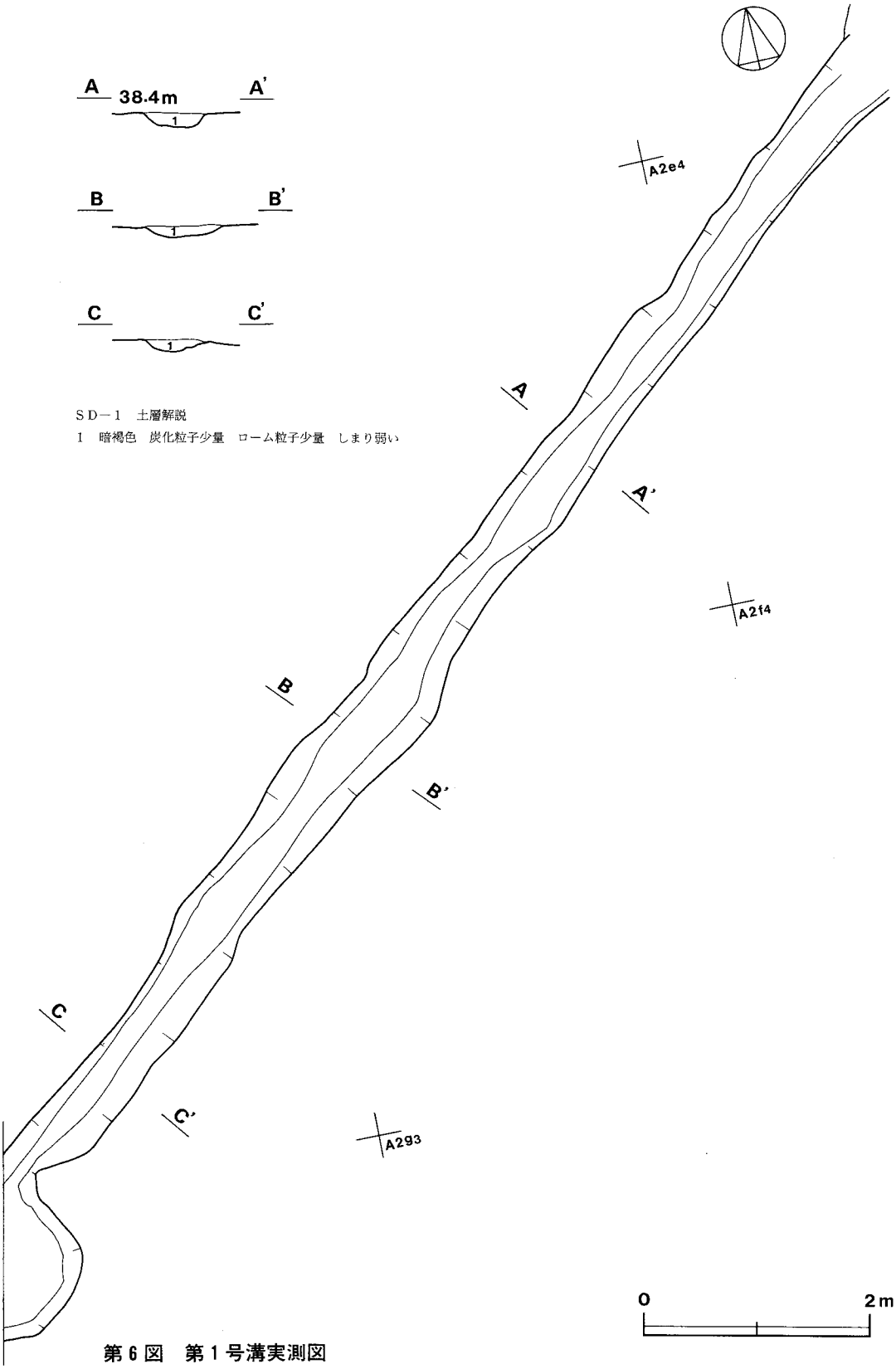
断面形は，「⋎」形で，謂ゆる箱薬研状を呈している。

底面は，北部のA2d_4区で標高37.3m，南部のB2d_1区で標高36.9mと南に向って緩やかに傾斜している。溝底には深さ10cm，長さ3～5m程の落ち込みが3か所ほどみられる。

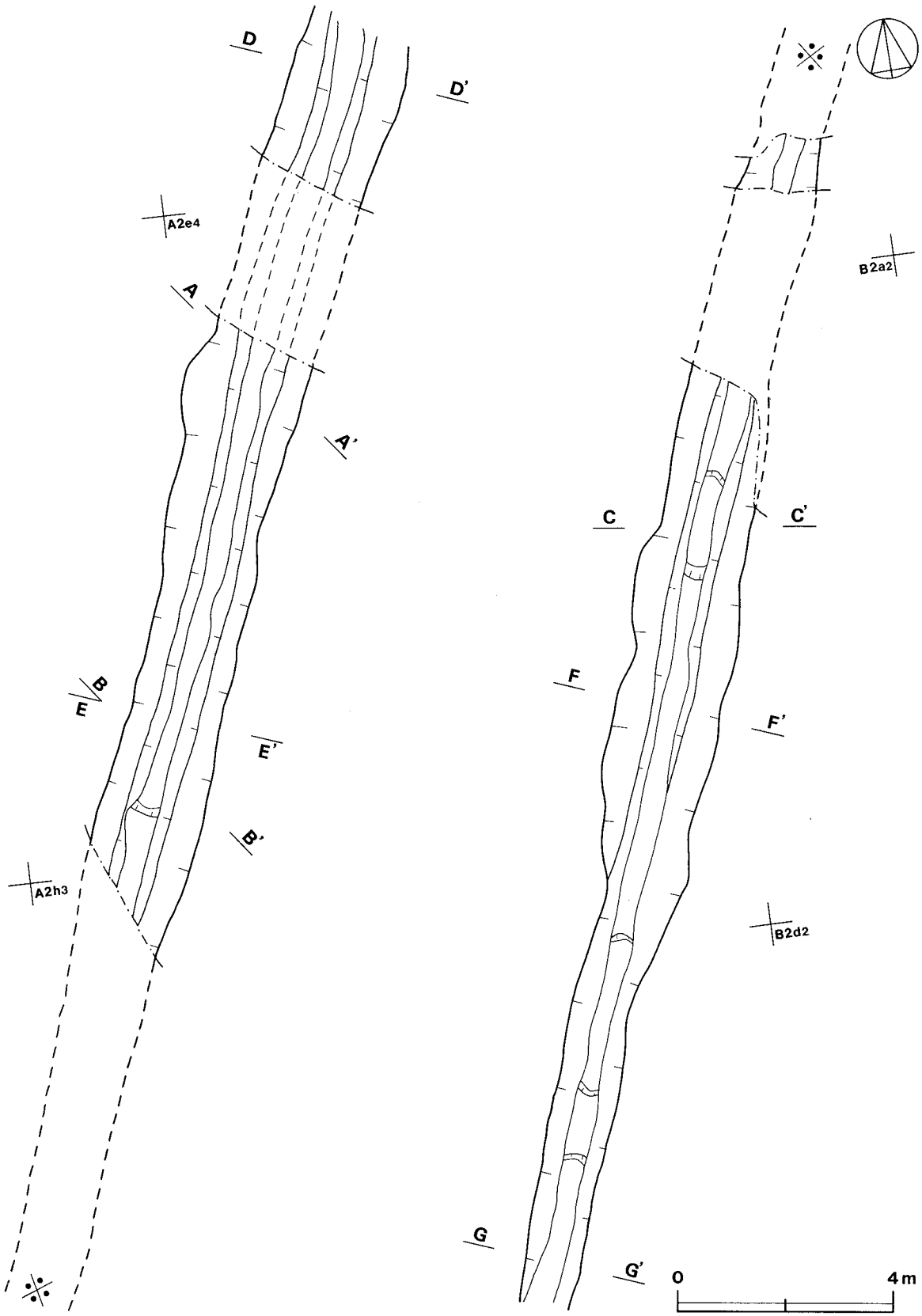
覆土は，黒褐色土又は極暗褐色土で締まりを持ちレンズ状に堆積し，自然堆積である。

遺物は，土師器の破片2点（小破片のため器種は不明）と石片（チャート）1点が覆土下層から出土しているが，いずれも流れ込みによるものと思われる。

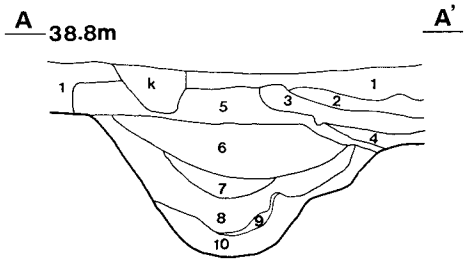
本跡は，古墳の周溝に上位を掘り込まれていることから，古墳よりも古いものと考えられるが，その性格については不明である。

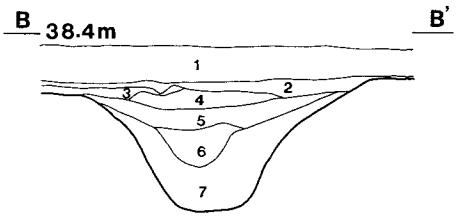

A
38.4m
A'
1
B
B'
1
C
C'
1
SD－1　土層解説
1　暗褐色　炭化粒子少量　ローム粒子少量　しまり弱い
A2e4
A
A'
A2f4
B
B'
C
C'
A2g3
0
2m

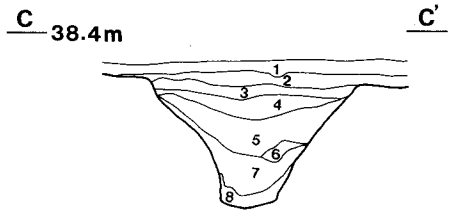
第6図　第1号溝実測図

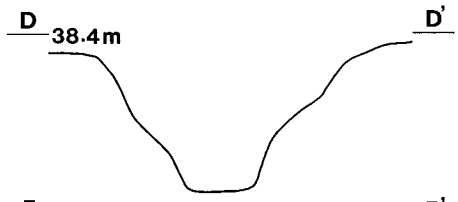


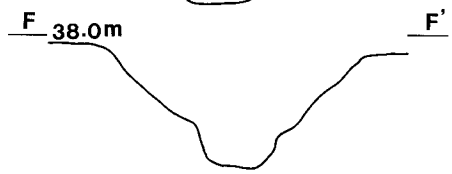
第７図　第２号溝実測図(A)

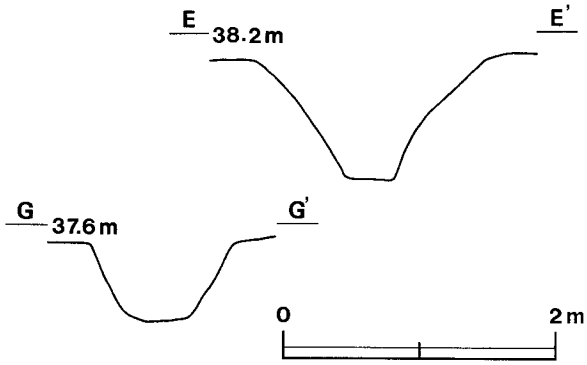












第８図　第２号溝実測図(B)

ＳＤ－２Ａ　土層解説

1　褐　色　耕作土
2　褐　色
3　暗褐色
4　褐　色
5　黒　色　　ＴＭ－１周溝覆土
6　黒褐色　焼土粒子少量　炭化粒子少量　ローム粒子少量
7　極暗褐色　〃　〃　〃
8　黒褐色　〃　炭化粒子中量　ローム粒子中量
9　暗褐色　〃　炭化粒子少量　ローム粒子少量
10　暗褐色　〃　ローム粒子中量　鹿沼土ブロック

ＳＤ－２Ｂ　土層解説

1　暗褐色
2　褐　色
3　暗褐色
4　黒褐色　　ＴＭ－１周溝覆土
5　極暗褐色　炭化粒子少量　ローム粒子少量　しまり有
6　黒褐色　〃　〃　〃
7　黒褐色　〃　ローム小ブロック少量　しまり有

ＳＤ－２Ｃ　土層解説

1　暗褐色
2　褐　色　　ＴＭ－１周溝覆土
3　黒褐色　ローム粒子少量
4　黒褐色　焼土粒子少量　ローム粒子少量
5　黒褐色　炭化粒子少量　ローム粒子中量
6　極暗褐色　焼土粒子少量　ローム粒子少量　しまり弱い
7　黒褐色　焼土粒子少量　ローム粒子少量
8　黒褐色　〃　ローム中ブロック少量

第4章　考　　察

1　和尚塚古墳について

今回の調査は，古墳の周溝だけの調査で，古墳時代の遺物も出土していないことから，和尚塚古墳は本当に古墳かという基本的な問題が浮上してきた。本章では，この問題について，発掘の成果や伝承等から考察を試みた。

なお，本章では古墳と塚の両面から和尚塚古墳の検討を進めるため，以下の文では，和尚塚古墳を地元の呼称にならい「和尚塚」とのみ記することとする。

(1)　古墳としての可能性と問題点

和尚塚が古墳と考えられる根拠は，円筒埴輪が出土し，かつて大形の石棺が破壊されたと伝えられている（結城市史第四巻）こと及び今回の調査により周溝が検出されたことである。

円筒埴輪の出土と石棺の破壊が事実とすれば，和尚塚が古墳であることは疑うべくもないが，今回の調査では，出土したはずの円筒埴輪も石棺が破壊されたという伝承も残念ながら確証を得ることはできなかった。強いていえば，塚の南斜面に残る盗掘を思わせる窪みが石棺の破壊に関係するものかも知れないと思われる程度である。

今回の調査で検出された周溝については，これが和尚塚に関係するものであることは両者の位置関係からいっても明かであるが，極めて浅く，形状にも区画の意図が感じられないことから，これを古墳の周溝と断定することはできない。

また，周溝からは，当遺跡に関係する遺物も出土していない。

以上のことから，和尚塚を古墳であると断定するには若干の問題があると思われる。

(2)　中・近世の塚としての可能性と問題点

和尚塚が中・近世の塚ではないかと考えられる根拠は，地域に残る２つの伝承と，今回の調査によって出土した遺物のほとんどが中・近世のものであるということである。

和尚塚にまつわる２つの伝承の１つは,「和尚塚は華蔵寺の何代目かの住職が即身成仏をした場所である」とするものである。この伝承は，塚の名称とも関係する上，今回の調査で出土した遺物の年代と比べても無理がないため尤もらしく思われる。しかし，華蔵寺は，創建の当初から臨済宗の禅寺であり，密教的な即身成仏とは無縁と考えられることから，伝承をそのまま信ずることは困難である。かりに，即身成仏が行われたとしても，これ程の規模の塚を築く必要があったのかも疑問である。

もう１つの伝承は，「和尚塚は吉田用水掘削時の廃土によってできた」とするものである。この伝承からすると，塚の成立年代は1700年代ということになるが，今回の調査で出土した遺物で，

この年代に該当するものは少なく，それらはいずれも後世の流れ込みによるものと思われる。

また，塚の盛土が吉田用水掘削時の廃土から成ると考えた場合余りにも土量が少ない上に，廃土をここまで運んだ理由や，塚として築いた理由についても疑問が残る。

以上のように，和尚塚にまつわる伝承については，いずれもそのまま信ずることはできないものである。

しかし，前述のとおり，周溝から中･近世の遺物が多く出土していること等から，和尚塚が中･近世の塚である可能性も捨て切れない。その場合，周溝の存在から考えて，塚の盛土は他から運んで来たものではなく，周辺の土を盛り上げたとするのが妥当と思われる。

(3) 小結

以上，和尚塚は古墳か中・近世の塚かについて簡単な考察を試みてみたが，塚そのものの調査が行なわれていない現状では，どちらとも断定できないという不満足な結果に終わった。

今後は，従来の古墳としての見方ばかりではなく，中・近世の塚としての可能性も考慮して和尚塚の研究が進められることを希望したい。

結　　語

主要地方道結城野田線の道路改良工事に伴う和尚塚古墳の発掘調査を，平成２年８月１日から同年８月31日にかけて実施し，周溝の一部と溝２条を確認することができた。

古墳の墳丘は方形状を呈し，周溝も方形状に墳丘を取り巻くことから，本古墳は方墳である可能性が高くなった。しかし，撹乱をうけている部分が多いことや，古墳及びその時代に関係する遺物がほとんど出土していないこと等から，古墳の築造年代や性格についての検証はできなかった。さらに，出土遺物のほとんどが，中世以降のものであることから，和尚塚古墳そのものを中・近世の塚という観点から見直す必要性も生じてきた。

溝２条のうち，第１号溝は近世以降のもので，調査区の北部を北東から南西に延びており，近世以降の陶器片を少量出土している。第２号溝は，周溝より古手のもので，調査区を縦断するように北北東から南南西に延びている。

和尚塚古墳の整理を担当し，当遺跡の解明に意を注いできたつもりであるが，何分にも周溝の一部の発掘で得られた情報は少なく，事実のみの報告に終わった。

なお，本報告書をまとめるにあたり，結城市教育委員会をはじめ，関係各位の御指導・御協力に対し，文末ながら深く感謝の意を表する次第である。

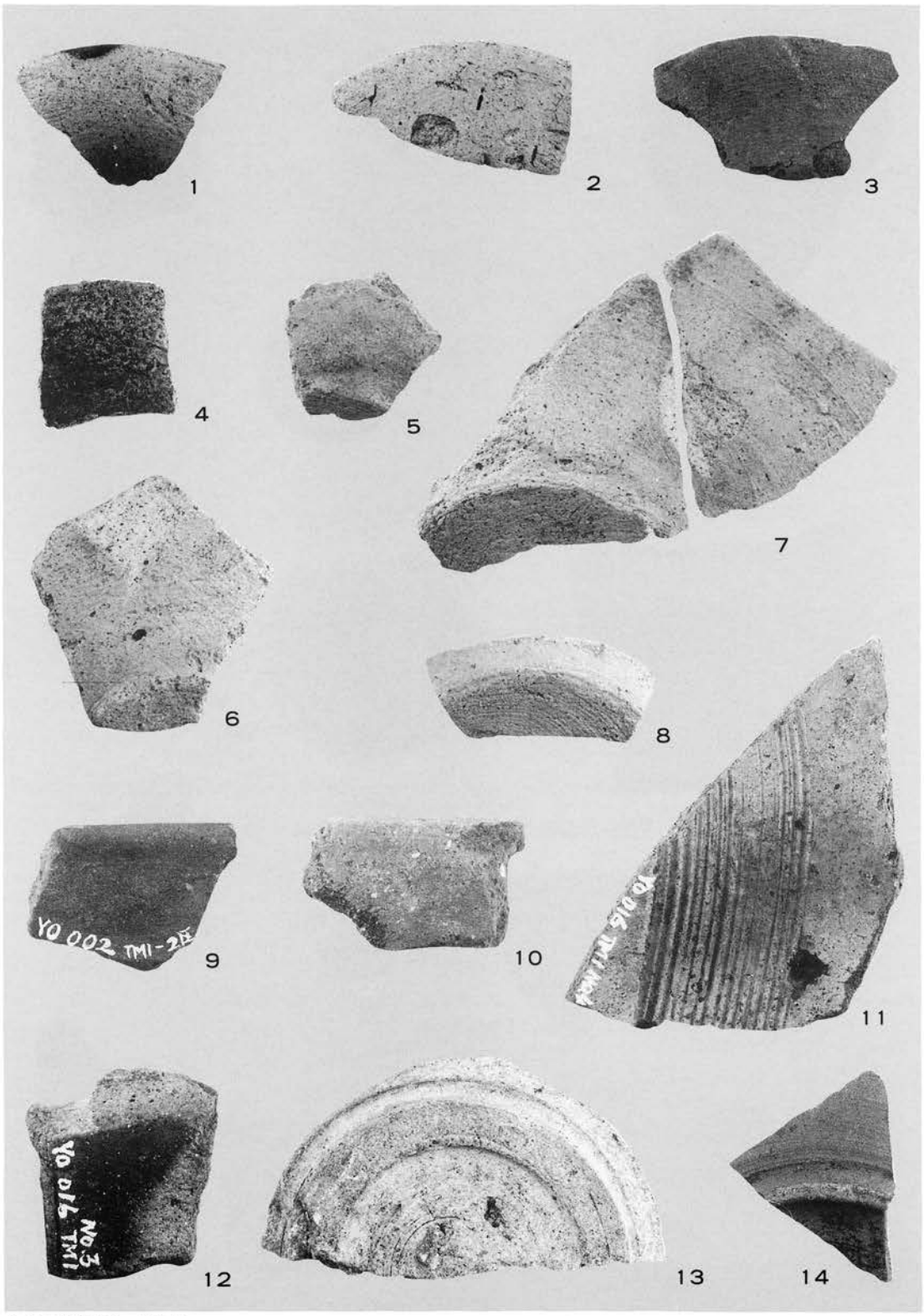
写　真　図　版

遺跡全景

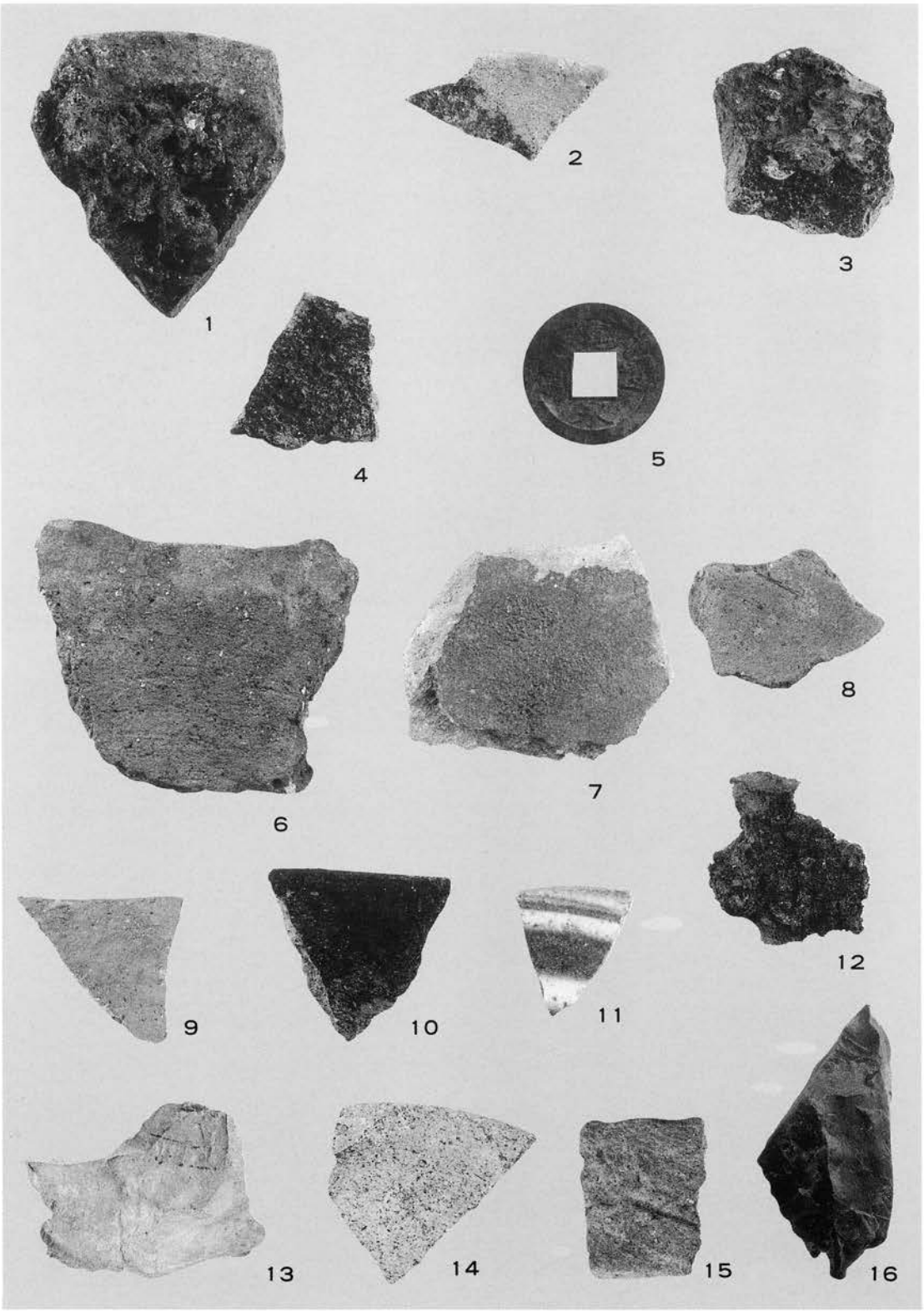
和尚塚古墳全景

遺構全景

和尚塚古墳墳頂部の石碑



古墳周溝部出土遺物



1～5　古墳周溝部出土遺物(1～4は銅滓付着), 6～13　第1号溝出土遺物, 14～16　第2号溝出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第69集

主要地方道結城野田線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書
和尚塚古墳

平成３年３月25日印刷
平成３年３月31日発行

発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町３丁目４番57号
TEL　0292-25-6587

印　刷　株式会社　あけぼの印刷社
〒310 水戸市松が丘2-6-24
TEL　0292-51-5265㈹